

人民解放団

— ロシア・ジャコバン派の組織運動をめぐる最近の研究動向 —

早坂真理

はじめに

これまでのナロードニキ運動の研究史をみると、ポリシェヴィズムの源流とみられていたロシア・ジャコバン派は、スターリン体制が固まるとともにナロードニキの垂流として切り捨てられ、長いあいだ研究の上で抹殺されてきた。そのみならず、この組織運動が実際にあったのかどうか、あるいはあったとしてもどのように展開されていたのかも解明されないまま放置され、また荒唐無稽なものともみなされたり、その実在性を強く否定する傾向が長いあいだ続いた^①。しかし、近年のペレストロイカによる歴史の見直しの気運のなかで謎に包まれたロシア・ジャコバン派についても再評価の兆しが訪れ、史料的裏付けをもってこの組織運動の実像に迫り、とりわけ『警鐘』編集部との強い結びつきを論証する研究が現れてきた。本稿は、これまで等閑視されてきた、謎に包まれた「人民解放団」の実体解明に正面からとり組んだ研究史を振り返り、この組織運動が当時の国際関係及び国際社会主義運動のなかでどのように必然であったのか、そしてロシアの革命運動にどのように浸透していたのかを検証する近年の研究動向も含めて紹介してみたい。

〔注〕

①拙稿、「ロシア・ジャコバン主義をめぐる研究史概観」『茨城大学教養部紀要』22号（1990年）。参照。

I. 最近の研究動向における再評価

人民解放団の歴史を真正面からとり上げたのは、E. П. ルドニツカヤが『ソ連邦史』（1986年6号）に掲載した論文「人民解放団の起源 — ロシア・ブランキズムの思想的組織形成の歴史から —」^①である。この論文で彼女は、B. ニコラエフスキ^②、B. コズイミン^③およびE. クーシェヴァの一連の研究^④を踏まえながら、この組織運動の起源と実体を明らかにするとともに、この組織運動がロシア本国におけるП. Г. ザイチネフスキの「オリョール・サークル」との密接な提携の上に成立し、『警鐘』編集部内で第三の地位を占めていたH. M. シレイデル・フレンクがその直接の仲介者であった事実を紹介している。この論文ではまた、ネチャーエフがバクニンと袂を分ち、トゥールスキ等とともにロシア人、ポーランド人、セルビア人革命家たちを集めて、ロシア・ジャコバン組織の中核をつくり上げたこと、そして彼が逮捕されたあと、トゥールスキが中心となってスラヴ・サークルがつくられ、やがて亡命してきたトカチョフやフレンクを引き込んで『警鐘』派の陣容を整えていった経緯が詳述されている。アメリカの歴史家W・マクレランが発見して英文で紹介したところの^⑤、スイスの州政府がネチャーエフを逮捕した際に押収した『基本綱領』を、彼女が再度ロシア語に翻訳し直して紹介していることも、この論文の長所となっている。この『基本綱領』というのは、ネチャーエフが起草し、裏切り者アドルフ・ステンブコフスキに託したものである。内容的にみて、この『基本綱領』は、ネチャーエフが以前に書いた『革命家のカテキズム』や『人民の制裁』を下地とし継承してい

のみならず、のちの人民解放団の規約とも内容上通底するものと考えられる。

その後ルドニツカヤはB. C. イテンベルク編集の論文集『ロシアの革命家と自由主義者』（1990年、モスクワ）に論文「人民解放団とロシア本国との結びつき（II. Γ. ザイチネフスキとオリョール・サークル）」^⑥を発表し、前掲論文を発展させる方向でザイチネフスキ・サークルとの具体的な交流の実態に迫り、クーシェヴァが紹介した人民解放団の組織規約にみられる活動家の行動形態を分析しつつ、この組織運動が開始された時期の確定を試みている。これは、もちろん露土戦争という緊迫した国際情勢に対応したものであるが、しかしこの点についてはルドニツカヤは十分な検討は行っていない^⑦。

このほか最近の研究のなかで特筆されるのは、B. M. シャフマトフの論文『オーギュスト・ブランキと革命ロシア（評価、影響、交流）』（『フランス年報』1983）である^⑧。シャフマトフは、長年トカチーフの論考を社会的に分析してきた研究者である。彼は、1920年代30年代のロシア・ジャコバン論争以来ブランキおよびブランキズムとロシアの革命運動との関係に言及する研究はなかったとし、この領域での研究の空白を指摘した上で、ザイチネフスキやトカチーフには直接ブランキの思想に言及した箇所がないことを理由に、むしろ彼らをデカプリスト、ペトラシェフスキ、チェルヌイシェフスキの系列、すなわちロシア・ジャコバン派の思想をロシアの啓蒙主義の伝統に位置づけるべきことを主張している。この観点に立ってシャフマトフは、実際上フランスのブランキ派との提携を推進し得たのはポーランド人亡命者トゥールスキであった、と推測するのである。けれども、このシャフマトフの論文は、たとえばブランキ派の組織“革命的コミュニオン”と人民解放団との結びつきについて史料の裏付けをもって書かれたものではなく、あくまでもニコラエフスキやクーシェヴァの論文に依拠したものにすぎず、推測と問題提起の域を出るものではない。この点はシャフマトフ自身も認め、今後の

研究課題に委ねるとしながら、ロシア（旧ソ連も含む）においてはいまなお十九世紀末のロシアとフランスの社会主義運動の直接の交流史については、正統的解釈を除けば研究がないとし、研究の不備を指摘するにとどめている。

人民解放団の成立事情には直接触れていないものの、間接的に言及したものとしてB. Я. グロースルの研究書『南東ヨーロッパにおけるロシアの革命家たち（1859-1874）』（キシニョフ、1973）^⑨が出色である。著書なかでグロースルは、ネチャーエフが西欧へ亡命する以前にバルカン半島の革命家たちと交流をもち、ネチャーエフ本人もモルドヴァ方面を旅行し工作活動の拠点づくりを進めていた事実を明らかにしている。バルカン半島に拠点を置こうとするネチャーエフの活動については、1920年代1930年代のロシア・ジャコバン主義論争の際にブルガリアなどの研究者たちによってもすでに指摘されていた^⑩ところであるが、グロースルがこの点を復活させたことがなによりも重要である。というのも、先にも触れたように、トゥールスキ等が指導するスラヴ・サークルには多数のスラヴ系活動家があり、そのなかではセルビア人の活動が目立っていたからである。バルカン半島に工作活動の足掛かりを築くことは、対ロシア政策のノウハウを熟知する亡命ポーランド人トゥールスキにとっては当然のことであった。のちの人民解放団が武装抵抗の象徴として称賛したII. M. コヴァルスキの活動拠点はオデッサであり、ここがロシア本国と西欧との中継地となっていたことは十分に想像されるのである。対ロシア政策を進める上でバルカン半島からウクライナにかけての地域の戦略的重要性を認識し、そして露土戦争という東方の危機を革命に転化させようとするロシア・ジャコバン派の世界革命の戦略を把握したグロースルの着眼点は優れている。なお小論文とはいえE. K. ジグーノフの論文「十九世紀70年代80年代のロシア人セルビア人革命家たちとの交流について」（『ソヴィエト・スラヴ研究』）^⑪も実証研究に支えられた好編である。ジグーノフは、トゥールスキが中心となってネチャーエフの残党

を集めてつくったスラヴ・サークルというのは、コズイミンがひとつだけと考え、またクーシェヴァが実体不明としたものは実は二つあり、ラヴロフが中心となってパリに設けた穏健なスラヴ・サークルとは異なる、独自のジャコバン・サークルであったことを論証した。

グロスールとジグーノフの主張の骨子は、いずれもクーシェヴァの論文「1870年代のロシア人セルビア人革命家たちの交流から」(『ソヴィエト・スラヴ学研究』1944年1号)^⑩に依拠したものであった。このクーシェヴァ論文は、次節で紹介する彼女の論文「人民解放団の歴史から」(『答刑と流刑』1931年4号)の延長線上にあり、1878年1月30日のオデッサの革命家イヴァン・マルティノヴィチ・コヴァルスキイの逮捕と家宅捜索の際に押収された一連の文書のなかに含まれていた暗号文を手掛かりに分析を進めたものである。コヴァルスキイが所持していた暗号文というのは、クーシェヴァによれば、かつてバクーニンが秘密結社をつくる際にまとめた暗号文と酷似したものであった。彼女は、これがその後ネチャーエフが独自活動をはじめるときにつくられたものであったと断定し、暗号に含まれている内容から具体的にスラヴ・サークルに参加していた人物の具体名を割り出したのであった。そして彼らが、1870年代初頭のセルビアの蜂起実現に深く関わっていた事実をつかんだのである。こうしたロシア人、セルビア人、ポーランド人の組織活動の環のなかにオデッサの革命家コヴァルスキイもいたのであり、バルカン半島を磁場とした革命情勢に照準を合わせた革命行動の展開こそロシア・ジャコバン派の本当の狙いであった、というのがクーシェヴァの結論であった。こうした行動の展開にはセルビアの革命家スヴェトザル・マルコヴィチの活動も絡んでいたとみられ、こうした環のなかに人民解放団の活動が位置づけられる、ということを示唆した重要な論文であった。東方の危機に臨んでロシアの汎スラヴ主義と対決せんとする革命家グループがどのように活動を展開しようとしたのか、国際的連関のなかで人民解放団の活動を位置づける作業が研究

の上で果たされなくてはならない。

次節では、人民解放団の歴史の解明にはじめてとり組んだクーシェヴァの論文の概要をみることにする。

〔注〕

- ① Е.Л.Рудницкая, У истоков «Общества Народного Освобождения» к истории идейного и организационного оформления русского бланкизма, «История СССР» no.6, 1986.
- ② Б.Николаевский, Памяти последнего якобинца -семидесятника (Гаспар Михаил Турский), «Каторга и ссылка» no.11 (1926), стр.211-227.
- ③ Б.П.Козьмин, Из истории революционной мысли в России, М.1961. его же, П.Г.Зайчневский в Орле и кружок «орлят» (1873-1877 гг.) «Каторга и ссылка» 1931, кн. 10 (83).
- ④ Е.Кушева, Из истории «Общества Народного Освобождения», «Каторга и ссылка» 1931, кн. 4 (77). её же, Из русско-сербских революционных связей 1870- х годов, «Ученые записки Института Славяноведения», т.1, 1949. стр.343-358.
- ⑤ cf. Maclellan, W., Nechaevschchina : An Unknown Chapter. Slavic Review. Sept. Vol.32, no.3.
- ⑥ Е.Л.Рудницкая, «Общество Народного Освобождения» и его русские связи (Кружок П.Г.Зайчневского), Б.С.Итенберг (ред.), Революционеры и либералы России, М. 1990.
- ⑦ 拙稿、「ロシア・ジャコバン派とミハイロ・ドラホマノフの論争—国際主義と民族主義の狭間—」『茨城大学教養部紀要』第26号 (1994年)。56-59頁。
- ⑧ Б.М.Шахматов, Л.О.Бланки и революционная Россия (отзывы, влияния, связи), «Французский Ежегодник» 1981, М.1983. стр.56-69.
- ⑨ В.Я.Гросул, Российские революционеры в юго-восточной Европе, Кишнев 1973.
- ⑩ たえば以下の文献がある。
Г.Бакалов, Русские друзья Христа Ботева, — «Летописи марксизма», 1926, no.2. его же, Христо Ботев и Сергей Нечаев, — «Летописи марксизма»

1929, no.9-10. его же, Русская революционная эмиграция среди боргар. — «Каторга и ссылка» 1930, no.2 (63).

- ① E. K. Жигунов, К истории русско-сербских революционных связей 70-80-х годов XIX века (П. Л. Лавров и сербские революционеры). в кн. «Советское славяноведение», Минск 1969.
- ② E. Кушева, Из русско-сербских революционных связей 1870-х годов, op.cit.

II. クーシェヴァ論文の概要

1931年の『笞刑と流刑』（第4号）に掲載されたクーシェヴァ論文は、同年3月16日の「政治犯協会」主催の研究集会での彼女の報告を基にしたものであった。人民解放団の存在を指摘した彼女の報告は、出席者のあいだでかなりショッキングであったらしく、出席者のひとりB. フィグネルは人民解放団を荒唐無稽なものであるとして懐疑的な態度を示し、フィグネルに同調する者が多かったといわれる^①。また同時代人のひとりM. フロレンコは、ただちに人民解放団の存在を否定する論文を発表している^②。クーシェヴァ自身、論文の冒頭で、人民解放団を全くのペテンとみる1870年代後半に活躍した同時代人の批判的証言が多い事実は認めた上で^③、同じく1926年の『笞刑と流刑』誌に掲載されたニコラエフスキの論文「最後のジャコバン、70年代人、ガスパル・ミハイル・トゥールスキ」に鼓舞され、これを継承発展させる意図をもって執筆したと述べている。ニコラエフスキの論文は、ルドニツカヤも確認しているように、晩年のトゥールスキを訪問したB. ブールツェフとトゥールスキとのあいだの往復書簡を基にしてまとめられたものであった^④。ロシア・ジャコバン主義をめぐる研究の欠陥は、いうまでもなく、トカチョーフを除いて理論的著書がなく、殆どが秘密と陰謀のヴェールにつつまれ、かつ最大の組織家であったトゥールスキが記録らしい記録を殆ど残さなかったことに起因している。

クーシェヴァ論文は、人民解放団の誕生の時期確定に主眼を置き、コヴァルスキ・サークルやザイチネフスキ・サークルとの提携がいつどのように確立されていったのか、を仮説的に論じたものである。史料としては、第三部のアルヒーフのみならず、ロシア本国に潜む人民解放団の結社員たちがジュール・ゲードの編集する『レガリテ』誌に送った通信文などを利用している。ロシアからの通信文が1877年暮れから翌年にかけて集中的に掲載されている点にとくに注目した彼女は、人民解放団の誕生は露土戦争の勃発と対応しており、戦争をツァリイズムの危機と捉え、革命に転化させるという戦略にしたがってその活動を展開させた、と判定した^⑤。人民解放団の宣言文は、ブルツェフが1903年に『フィローエ』誌に紹介している^⑥。宣言文に1877年4月に勃発した露土戦争の六ヵ月間に及ぶ戦争の様相が紹介されていることから考えて、1877年末までに何らかの人民解放団の組織活動の具体化が図られたことが推測されるというのである^⑦。彼女は、この宣言文がフランスの『レガリテ』誌でも紹介され、ロシアの専制が危機に瀕していること、公然蜂起が切迫していることを訴えている点に注目している^⑧。

翌年1月24日のB. ザサーリチによるトレポフ暗殺未遂事件、そして1月30日のオデッサにおけるコヴァルスキの武装抵抗は、人民解放団の活動を正当化させる新しい論拠を与えた。まさにこれに対応していると思われるが、3月にはトゥールスキの執筆による『革命的制裁』なるパンフレットが出された。このパンフレットは、冒頭に「人民の敵をテロルによって圧殺せよ、共和国の礎となる榮譽は諸君たちに属している。」というロベスピエールの演説の一文を掲げ、さらにロシア革命運動史におけるJ. カラコーゾフやネチャーエフのテロリズムを称賛する内容を含んでいる^⑨。この『革命的制裁』は先述の宣言文よりも一層語調はきつく明快であり、表題もネチャーエフの『人民の制裁』に因んでいるのはいうまでもなく、内容的にも一致するところが多い。これはまた、1877年から1879年にかけてトゥールスキが『警鐘』

誌上に掲載した一連の論文『革命的プロパガンダ』を補完した内容をもっている^⑩。理論的には、トゥールスキがアマリの偽名で出版した、彼としては唯一の理論書『政治における観念論と唯物論』（1876年）に支えられたものであった^⑪。

1877年末から翌年前半にかけて約一年間、『警鐘』は編集を中断するが、おそらく人民解放団の組織活動と革命工作に忙殺されていたのであろう。この間、人民解放団はほかに「祖国は危機に瀕す！」を叫ぶブランキ派特有のスローガンを掲げた文書を発行していたらしい。けれども、こうした強い政治革命への志向は、ロシアのほかの革命家のあいだでは歓迎されず、『オープンシチナ』誌に結集するバクーニンを支持するブントーリ系の革命家たちは「必要とされる解説」なる一文を掲げ、「人民の解放は人民自身によって果たさなければならない」と主張し、人民解放団の主張をデマであると決めつけ、激しく反発している。10月20日付けで署名した者のなかにはザスーリチの名前もあった^⑫。

クーシェヴァは、コヴァルスキイの家宅捜索の際に『警鐘』が多数押収されたこと、1877年12月1日付けの『警鐘』に掲載されたオデッサからの通信文がコヴァルスキイによって書かれたものであることを確認した上で、コヴァルスキイが人民解放団の結社員であったと断定した^⑬。このコヴァルスキイ・サークルに所属していたH. ヴィタシェフスキイも結社員であったと彼女は述べているが、面白いのは、後年発表されたヴィタシェフスキイの回想録には、コヴァルスキイをジャコバンとみることを否定する記述があり、純粋なブントーリとみていた点である^⑭。ということは、同じサークル内であっても、結社員であることをお互いに隠しあって活動していたということであり、こうした行動形態は人民解放団の組織規約を遵守した結果であったと考えられる。

『警鐘』編集部との通信のなかでとくに目立つのは、ウクライナの各都市、とりわけキエフ、ハリコフ、チェルニホフ、ポルタフ、ロストフ・ナ・ドヌー、エリザベトフラト、カメニェツ・ポドル

スキからのものである。ペテルブルクでも、1877年から1878年にかけてジャコバン・サークル「ボルディリ、バンドウーラ、バラライカ」と呼ばれる三人組が活動していたらしい^⑮。のちのエスエル、H. C. ルサーノフの回想録によると、ペテルブルクにはザイチネフスキイの薫陶を受けたオシャーナやアルツイブーシェフがいた。ルサーノフの指摘で興味深いのは、女ジャコバン、オシャーナが「土地の自由」派の著名な活動家であったオシンスキイに強い影響を与えていたという事実である。このように、ジャコバンたちは何らかのかたちで秘密裡に「土地と自由」派に浸透していたというのである^⑯。

クーシェヴァは、このほかにも個々のジャコバンの活動を紹介しているが、彼女が、人民解放団がロシア本国では強力な浸透力をもつことはなく、また「人民の意志」党との競合は一般的にみて力不相応であった、というやや調子を下げた結論の引き方をしている。とはいえ、クーシェヴァも確認しているように、『警鐘』派はH. A. モローゾフやΓ. ロマネンコを介して「人民の意志」党との接触を求めていたことは事実であり、トカチョーフ自身がフランスのブランキ派の政治誌『神もなければ主人もいない』誌において、自分たちが力不足であったことを認めながらも、決して荒野の叫び声ではなかったことを強調しており、この点はもう一度見直される必要があるだろう。ともあれ、ロシアの革命運動史上の二大組織となった「土地と自由」派と「人民の意志」党に人民解放団がどれほど食い込み、影響力を行使していたかを測定するのが今後の研究の課題ではないか、というのが彼女の結語であった^⑰。そして近年、この問題関心を引き継ぎ史料分析を進めたのが、次節で紹介するルドニツカヤの研究であった。

〔注〕

① Рудницкая, «Общество Народного Освобождения» op.cit., стр.142-143.

② М.Фроленко, «Общество Народного Освобождения», «Каторга и ссылка» 1932, кн.3(88).

- ③ Кушева, Из истории “Общества Народного Освобождения”, *op.cit.*, стр.31.
- ④ Рудницкая, *op.cit.*, стр.147-148.
- ⑤ Кушева, *ro.cit.*, стр.33-35.
なおクーシェヴァが引用した“L'Egalité”に掲載されたトゥーラからの通信文は以下の通り。no.8(20 I 1878), no.19(7 IV 1878), no.22(28 IV 1878), no.31(30 VI 1878), no.32(7 VII 1878).
- ⑥ Прокламация “Общества Народного Освобождения”, «Былое» no.3, февраль 1903, стр.173-175.
- ⑦ Кушева, *op.cit.*, стр.34.
- ⑧ “L'Egalité”, no.8(20 I 1878).
- ⑨ К.Турский, Революционная расправа, Женева 1878.
- ⑩ Турский, Революционная пропаганда, «Набат» no.1, 2,3,4,5-6(1877), no.5-6(1878), no.1-2(1879).
- ⑪ Турский, Идеализм и материализм в политике, Женева 1877.
- ⑫ Необходимое разъяснение (Письмо в редакцию), «Община» Женева 1878, no.8-9.
- ⑬ Кушева, Из русско-сербских революционных связей, *op.cit.*
- ⑭ Н.Виташевский, Первое вооруженное сопротивление, - первый военный суд. (Процесс И.М. Ковальского) «Былое» 1906, no.1-2.
- ⑮ Кушева, Из истории «Общества Народного Освобождения», *op.cit.*, стр.52-53.
- ⑯ *ibid.*, стр.56. Н.И.Русанов, Из моих воспоминаний, Берлин 1923, кн.1, стр.195-197.
- ⑰ Кушева, *op.cit.*, стр.56.

Ⅲ. ルドニツカヤの研究

彼女の1986年論文の狙いは、1875年末の『警鐘』派の綱領の成立に到るロシア・ブランキズムの母体がネチャーエフとトゥールスキの協力関係を基に誕生した、とするニコラエフスキイの研究を再評価することにあつた。すなわち、思想的・組織論上の具体化が両者の緊密な結びつきの上に成立したものにほかならず、のちの人民解放団の活動

につながっていくという見通しを述べたものである。この組織の母体は、ニコラエフスキイも指摘しているように、ネチャーエフがバクーニンと袂を分かったあと組織活動を開始するが、トゥールスキを介してロンドンに拠点を構えていたW. ヴルブレフスキイを代表者とする亡命ポーランド人組織「ポーランド人民」と緊密な協力関係を維持し、またセルビア人革命家グループをも糾合し、スラヴ世界全体を視野に収めた組織活動をめざしていた。この趣旨に基づく政治的使命をもってトゥールスキは、非公式の情報によれば1872年5月から頻繁にガリツィア、ポズナン、そしてロシア各地(オデッサ、ハリコフ、モスクワ)を旅行し、そればかりでなくバルカン半島各地を広く旅行していたという。このようなトゥールスキの秘密工作の指針となっていたのが、ネチャーエフが起草した『基本綱領』であつたという。ネチャーエフが逮捕された8月2日(14日)、スイスの官憲に押収されたこの『基本綱領』については、最初にこれを発見したマクレランは、「ジャコバン主義、アナキズム、ブランキズムの安定性のないアマルガム」^①と説明し、ルドニツカヤもこの見解を支持して次のように書いている。

「実際のところ『基本綱領』には、スラヴ諸民族の革命的同盟とか昔ながらの共同体の形態に基礎を置く未来のスラヴ連邦に関するバクーニンの思想と、バクーニンの思想とは無縁なジャコバン主義やブランキズムに特有な革命政府による独裁という思想が奇妙に組み合わせられている。それとともに、ネチャーエフには、ブランキ派に特有な陰謀主義による革命とは異なる、革命党に鼓舞され方向づけられる人民蜂起に関するものも認められる。『基本綱領』に示されている労働の編成と調整に関するものや、社会革命の最終的勝利のあとの国家が果たすべき機能をめぐる全体的な性格規定は、ネチャーエフが『人民の制裁』やのちの『オープンシチナ』誌において宣言した兵営共産主義の理想と原則を想起させるものである。」^②

ルドニツカヤは、このネチャーエフの綱領を評価する論拠として、これがトゥールスキが書いた小冊子「ロシアのある革命家社会主義者グループからの若干の意見」の内容と基本的に一致する点を指摘している。マルクスの誹謗中傷に反駁するためにトゥールスキが書いたこの小冊子には、ネチャーエフとバクーニンが協力しあった事実はもちろん記載されているとはいえ、それよりもむしろネチャーエフがロシアの革命運動推進のためにあくまでもバクーニンを利用したにすぎず、バクーニンとネチャーエフの見解は本来一致するはずはなく、ネチャーエフ固有の革命家・陰謀家としての資質こそが革命行動には有用なのだ、という具合に、独立したネチャーエフの革命家像がとくに強調されているのである^③。トゥールスキによれば、バクーニンはすでに過去の人にすぎず、ロシアの実際の革命運動から遠ざかった人物でしかない。ただ、バクーニンのロシアの若者に対する影響力の大きさを考慮してネチャーエフはバクーニンの権威を利用したにすぎない。このようなトゥールスキの主張をルドニツカヤは受けとめ、ネチャーエフとトゥールスキの合作による綱領の準備過程こそが重要と判断したのである^④。

ネチャーエフが組織化に乗り出したこの運動体は、セルビア人グループの活動と密接な提携をめざしていたが、ネチャーエフの逮捕により提携は中断してしまった。ネチャーエフがロシア政府に引き渡されたあと、ステンブコフスキは10月25日付け(11月6日)の第三部宛の報告のなかで「ネチャーエフの全組織はいまやアレクサンドロフとトゥールスキの手中にあり、…もしトゥールスキの逮捕に成功すればネチャーエフの全組織はまちがいなく崩壊するにちがいない。」^⑤と書いている。この文脈は、ニコラエフスキが述べているように、ロシア・ジャコバン主義の中核・母体はネチャーエフが自由の身であった最後の時期につくられた、という主張の正しさを裏付けている。この組織、すなわちスラヴ・サークルの実体については、クーシェヴァとジゲーノフがすでに検証している。クーシェヴァは、このサークルはチューリヒとパリに

それぞれあり、パリのサークルは1872年秋にトゥールスキによってつくられたロシア人、ポーランド人、セルビア人からなる混成組織であったと考えた。一方ジゲーノフは、1873年3月にパリにあったとされるものはラヴロフを支持するロシア人、ポーランド人、セルビア人、チェコ人の混成グループでむしろ穏健な組織であったこと、この組織はチューリヒにあったトゥールスキともうひとりのポーランド人カロール・ヤニツキを中心として結成された極左グループとは全く異なるものであったことを明らかにした^⑥。けれども、同じころトゥールスキもパリにいて『アヴニール・ナショナル』誌に激しいラヴロフ批判の記事を載せていた^⑦ことを考えれば、トゥールスキがラヴロフのスラヴ・サークルと何らかの接触があったことも十分に推測される。これについてルドニツカヤはこう書いている。

「トゥールスキがのちの人民解放団の活動の基礎をなす原則を追求する目的をもって、パリにあったラヴロフを支持するスラヴ・サークルを内部改編しようとし、チューリヒの組織の綱領を基にしてブランキ派的傾向を色付けしようとしたのである。」^⑧

このようなお膳立てが整ったあと、1873年12月にトカチョーフが亡命してきた。そしてトカチョーフが自分を迎えたラヴロフ派と見解が合わず対立状態に陥ると、トゥールスキはトカチョーフを積極的に誘い、ジャコバン・グループへの参加を決意させたのである。ルドニツカヤは1990年の論文では、『警鐘』誌の綱領の作成に到ってもトカチョーフがまだ完全にはラヴロフと袂を分かったわけではなく、ジャコバン派の「政治犯救済基金」組織を介して協力関係を維持しようとしていた、と書いている。というのは、ルドニツカヤは、『前進』誌の編集部宛てに匿名で送られてきたこの組織の規約などの掲載依頼を『前進』編集部が執筆者の素性不明を理由にためらい、見送った事実を重くみたからである。ルドニツカヤは、この執筆

者と思われるИ. М. シレイデル・フレンクとラヴロフとの往復書簡について分析を進めた。ラヴロフは、11月2日にフレンクからの手紙を受け取り、救済資金づくりの提案を受けたことを回想録に記している。しかしラヴロフはただちに『警鐘』誌編集部、すなわちロシア・ジャコバン派の意図をかぎとり、フレンクに問いただした。フレンクは11月22日付けの書簡で、『前進』誌が協力してくれるかどうかを改めて問うた上で、自分等が「政治犯救済基金」を運営する在外工作組織を設けたいきさつを説明した。この一文は詳細な内容をもつもので、交渉のはじまった8月11日までにジュネーヴで起こったことを細かに説明したあと、この「基金」の目的がきたるべき革命雑誌の独自綱領の作成に間に合わせるためのものであったと釈明している。またフレンクは、2月にロシアにロシアから「r. K」なる人物がやってきてトカチーフと会いたがっていること、そして「基金」の創設が急務であることを告げ、具体的な実名も挙げて、モスクワで活動する革命サークルを紹介し、それと連携する必要を訴えているのである。^⑨

以上の文脈から「基金」が『警鐘』の誕生を前提としているのは明白であり、以後トカチーフは『警鐘』派の綱領の作成に専念し、フレンクが「基金」の運営を担当することになった。フレンクはロシア国内に「基金」の担当組織を置くことを計画する。11月24日付けの「r. K」のトカチーフ宛の書簡には、在外の「基金」組織はロシア本国に事務局が設置されねばならないこと、これは党組織の枠外に置かれるべきこと、そしてそれが成った暁には在外組織の任務は消滅する、と書かれていた。結果的に、この企画は挫折し、「基金」は『警鐘』誌編集部の背後に置かれることになった。それにしても、「r. K」とは何者なのか。ルドニツカヤは、モスクワ大学の元学生で、ロシア各地の革命サークルとの交流をもち、なかんずくオリョールのザイチネフスキイ・サークルのメンバーでもあったフレンク本人であると断定する。この人物の本名はИ. М. シレイデル、国外逃亡

中フレンクの偽名で1874年の末から行動していた人物である。ルドニツカヤは、トカチーフやトゥールスキを先頭とするブランキスト・グループが「r. K」の提案にしたがって亡命組織と国内の革命派との提携に道を開いたと考え、ここにこそ人民解放団のルーツがあると判断したのである^⑩。ニコラエフスキイは、「政治犯救済基金」というのは、あくまでも在外ジャコバン組織の隠れ蓑でしかなく、また合法的な資金調達組織でしかなかった、と書いているが、これは正しい指摘である。それゆえトゥールスキの証言するように、人民解放団の機関紙が『警鐘』誌であるというのも正しい見方と考えられる。ルドニツカヤの1986年論文の概要は大体以上であるが、1990年の彼女の論文は、人民解放団が提携していたとされるオリョールのザイチネフスキイ・サークルと人民解放団との関係にも一歩踏み込んで検討を進めている。

そもそもこの論文の狙いは、実在が疑問視されていた人民解放団の活動を証明することにあった。1931年3月16日の政治犯協会主催の研究集会のとき、クーシェヴァは第三部の史料やフランスの同時代誌『レガリテ』の記事を基にその実在を強調し、組織規約などの紹介を行ったが、人民の意志党の流れを汲むB. H. フィグネル、A. Я. ヤキーモヴァ、M. H. シュバーリン等は、耳にしたことがないとして否定的態度を採った。こうした懐疑的な雰囲気はクーシェヴァの論文の冒頭でも紹介されている通りであり、同じく『答刑と流刑』誌に掲載されたM. Ф. フロレンコの論文は、クーシェヴァ論文を真向から否定するものであった。けれども、この研究集会のなかにあつてC. H. ヴァルクのように慎重な姿勢をとる者もおり、彼は「その存在を否定したり、報告者〔クーシェヴァ〕が引用している価値を減殺することもまたいかなる根拠ももっていない」と述べ、コズイミンもこれに同調して、人民解放団の組織力は確かに弱かったとはいえ、まちがいなく実在しロシアの革命サークルとの交流をもっていたと証言した^⑪。しかしコズイミンは、交流があつたとしても1877年の初頭までで、そのころは人民解放団と

いう名称はなかったと考え^②，のちに『笞刑と流刑』誌に発表した論文「オリョールのП. Г. ザイチネフスキとオリョール・サークル（1873～1877）」では、1873年にザイチネフスキがシベリア流刑から戻ったあと故郷で革命サークルをつくって学習会などを開いていたが、ただしこのサークルは1877年初頭には消滅していたので人民解放団の傘下に入ることはあり得なかった、と書いている^③。ルドニツカヤは、コズイミンのこの文脈を検討対象としたのである。

この検証に立ち入る前に、ルドニツカヤが史料の典拠としたトゥールスキとブルツェフとの交流と往復書簡について紹介しなくてはならない。1907年ころ、イギリスのジャージ島の保養地にいたトゥールスキを訪れたブルツェフは、彼からロシア・ジャコバン派の運動に関する生の史料を入手することができた。このときの印象をブルツェフは、トゥールスキは大変野心的な男で、ロシアの革命運動における自分の貢献を誇らしげに語っていた、と述べている。そして回想録を執筆するよにとのブルツェフの提案を喜んで受入れ、両者のあいだで1908年末から往復書簡が交わされるようになった。しかし、第一次世界大戦がそれを中断させた。戦後になってブルツェフはトゥールスキの消息を尋ね当てるが、しかしそのときはトゥールスキはすでに病の床にあり、回想録を執筆する状態ではなかった。そのころプラハにいてC. П. メリゲーノフが編集する『異郷にて』誌で仕事をしていたブルツェフは、メリゲーノフに対して当時ニースに住んでいたトゥールスキに直接『警鐘』誌の活動に関する情報を提供してもらうよう進言し、それがきっかけとなって当時編集部にはニコラエフスキが論文を執筆することになったのである。ニコラエフスキが利用できたのは、1908年末からのブルツェフとトゥールスキとの往復書簡、ブルツェフの個人情報、そしてニコラエフスキに直接送られてきたトゥールスキの書簡であった。これが今日われわれが利用できる人民解放団の誕生の経緯を知ることのできる第一級の史料なのである^④。

コズイミンが「人民解放団は1877年初頭まで存続し、『警鐘』誌と関係をもっていた」と述べた典拠は、H. C. ルサーノフの回想録である。それによると、女ジャコバン、Г. Ф. チェルニャコフスカヤがE. H. ユージャコヴァを介してジュネーヴで『警鐘』誌編集部と接触し、職員となって翌年2月にロシアに戻り、まずキエフのジャコバン・グループと接触をもったあと、そのころ大きな組織に成長していたザイチネフスキ・サークルと提携工作に乗り出したのだという。ということ、彼女はジュネーヴ時代にすでにザイチネフスキ・サークルの存在を知っており、換言すれば、『警鐘』派はザイチネフスキ・サークルと早くから交流をもっていたということになる。1908年末のブルツェフ宛のトゥールスキの書簡には、1870年代の著名な活動家で人民解放団から除名されたП. А. チェリャーロフなる人物の消息を尋ねている箇所がある。それによると、トゥールスキはチェリャーロフなる人物をザイチネフスキ本人か、もしくは彼にもっとも近い人物と思いついてほしい。この事実は、人民解放団の活動が1877年以前にすでに活動をはじめていたことを裏付けており、クーシェヴァが検討に努力していた時期の確定よりももっと長い時間枠のなかで検討しなければならないことを促している。つまり、ルドニツカヤが前掲論文で紹介しているように、ネチャーエフの路線を継承する「政治犯救済基金」こそが人民解放団の表の組織だったという点である。このことは、トカチョーフが亡命する以前に『警鐘』派の綱領はでき上がっており、しかも在外ジャコバンは本国のジャコバンとの提携に成功した、とみるニコラエフスキの記述の正しさを証明している^⑤。そして「政治犯救済基金」を運営していたフレンクこそがその仲介役となり、まちがいなくザイチネフスキとの交渉を担当していたはずである。ルドニツカヤは、ルサーノフにしたがって、ザイチネフスキの政治的傾向をこう評価している。

「1789—1794年期の偉大なフランスのジャコバン

の演説を完璧に暗唱できる熱情的なジャコバンあり、かなりの程度陰謀的タイプの政治革命家である。そして革命勢力を、革命的インテリゲンツィアおよび社会の最良の部分、大都市労働者階級の部隊からよりすぐった良質の部分で構成される革命の軍隊のなかに見いだそうとしていた。』^⑧

ザイチネフスキに近い立場にいたA. E. オジャーロヴァの回想によると、彼は1875年ころモスクワで若い世代を前に、極端に陰謀主義的で中央集権的な組織をつくる必要を繰り返して述べたという。ザイチネフスキの主張によれば、それは各サークルが自発的に相互に連合したのではなく、上部委員会がすべての情報を掌握する革命結社の性格をもつものであったという。この回想を基にルドニツカヤは、人民解放団の思想の原型がザイチネフスキに起源をもっていると想定したのである。このような革命運動論や理論は、1870年代のロシアの革命運動にとっては異例のことであった。これと交渉をもっていたとされる人民解放団に関するクーシェヴァの紹介した史料によると、人民解放団は中央組織（ツェントル）、中央組織から派遣される工作員（エージェント）、末端工作員（チレン）の三段階で構成される位階制構造をもっていた。末端工作員は、中央から派遣される工作員の命令にしたがって単独で行動できる。中央から派遣される工作員は、同じく中央から派遣されてくる工作員ひとりとだけ面識をもち、その指示を受けて行動をする。自分が所属するサークル内の構成員全体について口外してはならず、自分ひとりの判断で他者を人民解放団に勧誘する資格ももっていない。中央組織の人的構成ははっきりとはわからないが、最高位階はトゥールスキ、ヤニツキ、トカチョーフ、グリゴリエフ、そしてフレンクの五人の構成であったと想像される^⑨。人民解放団の指導部にフランスのブランキ派が参加したか否かをめぐっては、ルドニツカヤは1924年12月18日付けのトゥールスキのブルツェ宛の手紙のなかにある該当箇所を紹介している。

「ブランキストの委員会と交流をもっていたのは、自分ただひとりである。…あなたはわれわれの組織についても、その機関紙が『警鐘』誌であること以外は殆どご存じない。ほかのことも、あなたはヴァイヤンとの関係についてわたしに問いただしてはいない。ヴァイヤンは、当時ブランキストの委員会のメンバーのひとりであった。彼はわれわれの組織と協定を結び、相互に責任分担の態勢を敷いていたのである。われわれの組織の方がはるかに陰謀的であったために、われわれの組織は殆ど知られることなく、またしばしば誤解に満ちた説明がなされてきたのである。』^⑩

トゥールスキのこの証言にしたがえば、人民解放団はフランスのブランキストの委員会とは一応別組織であった。あくまでもトゥールスキという個人を介しての協力関係であったのかも知れないが、この点についてはルドニツカヤはシャフマトフの見解にしたがっているだけで^⑪、なお今後研究課題として残されるであろう。

ところで、オリョールのザイチネフスキ・サークルの実体について、E. H. オロヴェンニコヴァの証言では、常時七～八名が人目のつかぬ場所で集会（学習会）を開き、スペンサー、チェルヌイシェフスキ、ラサール、マルクス、ラヴロフの著作を読み、フランス革命やパリ・コミューンについて学びレポートをまとめていた。ザイチネフスキは、在地のギムナジウムに通う上級クラスの生徒たちを前に熱っぽく自分の信念を語っていたという。そして彼らの多くは卒業後ペテルブルク大学などに進学し、学業のみならず革命運動にも身を投じていったのである。トゥールスキは、人民解放団に参加した者として、ザイチネフスキ・サークルからM. H. オロヴェンニコヴァ・ポロンスカヤ、Γ. チェルニャフスカヤ（ボハノフスカヤ）、B. Π. アルツィブーシェフの名を挙げている^⑫。なかでもオロヴェンニコヴァ・ポロンスカヤは、このサークルのなかでも際立った存在であり、人民の意志党の有力な活動家オシャーナの名で知られていた。1875年から翌年にかけて

て、オリョールからペテルブルクにやってきたころのオシャーニナが抱いていた考えについて、ルサーノフはこう記している。

「政府権力の中枢を打倒することなくして、社会革命は期待できない。専制との闘い、とりわけ専制を支える官僚制と警察機構との闘いにおいては、1793年のフランスにおいてそうであったように、極端を恐れることなくあらゆる手段を行使しなくてはならない、と彼女は考えていた。」²⁰

オシャーニナは「中枢」に相当する組織をつくり、『警鐘』派の宣伝に務め、やがてこうした活動の実績を踏まえつつ「土地と自由」派の創設への下地をつくっていった。要するに、彼女を介して『警鐘』派は「土地と自由」派の隊列に参加してきたのである。オシャーニナは、のちに「土地と自由」派が分裂したあと「人民の意志」党に加わった。彼女以外の著名なジャコバンとして知られるアルツイブーシェフは、とくに軍人社会のあいだで組織活動を行っている。彼はまたブンターリ系との協力関係も維持しており、ジャコバン・サークルへ引き込む工作を行っていたらしい。しかし彼らの活動は、「193人裁判」と「50人裁判」をもっていずれも途絶えてしまった。

オリョール・サークルと近い関係にあったのが、クールスクのサークルである。このサークルでは、のちにペテルブルク大学の学生となったM. A. チモフェーエフただひとりが人民解放団の構成員であった。チモフェーエフの回想によると、1879年9月ころ政治闘争とテロリズムの必要を考えていたチモフェーエフは、人民解放団の工作員II. II. フヴィツキイから組織への参加を勧誘された。このフヴィツキイという男は、『警鐘』編集部に入社したスパイ、A. H. モルチャーノフの報告では、ジュネーヴではオスマン帝国の偽造旅券をもち、ロダイコの名前で生活し、『警鐘』派内部でも目立った活動家であったという。このフヴィツキイが、クーシェヴァが警察文書から発見し紹介した人民解放団の組織規約をチモフェーエフに

手渡したのであった。1881年にチモフェーエフは逮捕されるが、彼の逮捕に連座して大学の同期生であり、クールスクの富裕な地主で、人民の意志党にも参加していたA. H. ラヴレニウスも逮捕された²¹。

ルドニツカヤは、1870年代中葉以降、ペテルブルクにはザイチネフスキイの息のかかったジャコバン・サークルがいくつかあり、いずれも「土地と自由」派に参加していったと推定する。モスクワでは、「土地と自由」派が分裂したあと、オシャーニナとチェリャーロフが中心となって人民の意志党系のサークルが活動を開始する。チェリャーロフは、トゥールスキがブルツェフに消息を尋ねた人物であった。このようにみえてくると、実に多くの「人民解放団」員が人民の意志党内でも活躍していたことがわかる。なかでもオシャーニナは人民の意志党の卓越した活動家であり、執行委員会のメンバーにもなった人物であった。執行委員会の構成メンバーのなかには、オシャーニナの妹ナターリア・オロヴェンニコヴァ、II. A. チホミーロフの妻となるE. II. セルゲーエヴァ、Γ. チェルニャフスカヤ・ボハノフスカヤがいた。エリザヴェタ・オロヴェンニコヴァも、人民の意志党の参加者であった。かつて「土地と自由」派内にオシャーニナとともにいたΓ. B. プレハーノフは、オシャーニナが人民解放団の結社員であったことは知らなかったらしい。しかし重要な点は、ルドニツカヤが適切に指摘しているように、ナロードニキ運動にロシア・ジャコバン主義が確実に浸透していたこと、とりわけ人民解放団に特徴的な組織論が確実に人民の意志党の組織論にも影響を及ぼしていたということである²²。

結びに代えて

以上みてきたルドニツカヤの研究は、ザイチネフスキイ・サークルの流れを汲むオシャーニナ等を介して人民解放団の活動が「土地と自由」派および「人民の意志」党の活動に確実に浸透していっ

た経緯を詳述したものであり、政治闘争の重要性、権力奪取の必然性が『警鐘』派の理論から直接に伝えられたことを明らかにしたものであった。この点は、1920年代30年代のロシア・ジャコバン主義論争のときにクーシェヴァが期待しつつも断念せざるを得ず、後世の研究者に委ねた課題であった。ルドニツカヤ論文の重要性は、ロシア・ジャコバン主義の思想分析にとどまるだけでなく、レーニン主義・ボリシェヴィズムの起源にかかわる論争や研究がスターリン時代に中断されたあと、絶えてなかった組織論・運動論に踏み込んで実証研究に乗り出したことである。

〔注〕

- ① Maclellan, op.cit., pp. 550.
- ② Рудницкая, У истоков «Общества Народного Освобождения», op.cit., стр.29.
- ③ ibid., стр.30.
- ④ 拙稿, 「ロシア・ジャコバン主義の誕生—『警鐘』の成立まで—」『茨城大学教養部紀要第23号』1991年。参照。
- ⑤ Рудницкая, op.cit., стр.31.
- ⑥ Жигунов, op.cit.
- ⑦ «Набат» no.4 (1876), стр.20. От редакцииに関連記事

あり。

- ⑧ Рудницкая, op.cit., стр.32.
- ⑨ ibid., стр.34.
- ⑩ ibid., стр.38.
- ⑪ Рудницкая, «Общество Народного Освобождения», op.cit., стр.142-143.
- ⑫ ibid., стр.143.
- ⑬ Б.П.Козьмин, Зайчневский в Орле и кружок «орлят» (1873-1877 гг.), «Каторга и ссылка» 1931, кн.10(83).
- ⑭ Рудницкая, «Общество Народного Освобождения», op.cit., стр.145-146.
- ⑮ ibid., стр.148-149.
- ⑯ ibid., стр.149-150.
- ⑰ ibid., стр.151.
- ⑱ ibid., стр.151-152.
- ⑲ Шахматов, Л.О.Бланки и революционная Россия, op.cit.
- ⑳ Рудницкая, op.cit., стр.156-157.
- ㉑ Русанов, На родине 1859-1882, М. 1931, стр.320.
- ㉒ М.А.Тимофеев, Пережитое. Отрывок из воспоминаний о семидесятих годах. «Каторга и ссылка» no.8-9(1928).
- ㉓ Рудницкая, op.cit., стр.160-161.

“Общество Народного Освобождения”

— историографический очерк последних исследований о конспиративно-организационной деятельности русских якобинцев —

Маконо Хаясака

В результате перестройки и распада СССР появилась возможность вновь рассмотреть историю русского якобинства, которая до последнего времени была табу для советских исследователей. Советский историк Б.Козьмин, который в 20-ых и 30-ых годах сформулировал основные положения в данной проблематике, в своих исследованиях уделял особое внимание идеологии главного теоретика движения, П.Н.Ткачева, считая его пионером марксизма-ленинизма. Но он не занимался исследованием всей организационной деятельности русского якобинства. Мы можем отметить касающуюся этого аспекта биографическую статью о главном организаторе движения К.М.Турском, написанную Б. Николаевским [“Памяти последнего “якобинца” — семидесятника (Гаспар-Михаил Турский)”. — «Каторга и Ссылка», 1926 г., 2(23)], а также статью Е.Н.Кушевой [“Из истории “Общества Народного Освобождения”. — “Каторга и Ссылка”, 1931, кн.4(77)]. Продолжая разработку темы в статье “Из русско-сербских революционных связей 1870-х годов” «Ученые Записки Института Славяноведения», 1949 г., т. I, Кушева раскрыла роль С.Нечаева в революционном сотрудничестве русских и сербов в начале 1870-ых годов. Анализируя заметки в записной книжке /словарь для конспиративной переписки/, конфискованной при аресте И.М.Ковальского в Одессе в январе 1878 года, она доказала факт широкого развернутой Нечаевым деятельности на Балканах. Принципы деятельности русских якобинцев исследовательница попыталась проследить в революционной работе редакции “Набата”. В дальнейшем в советской историографии русское якобинство и его деятельность рассматривались как проявление революционной ситуации. Между прочим, В.Я.Гросул в своей монографии [Русские революционеры в Юго-Восточной Европе. Кишинев, 1973] отметил то, что Нечаев развернул свою деятельность у южных славян и у румын и установил связи с местными революционерами. Он далее показал, что это сотрудничество было унаследовано в деятельности редакции “Набата”. В статье Е.К.Жигунова [К истории русско-сербских революционных связей 70-ых и 80-ых /Лавров и сербские революционеры/. — «Советское славяноведение». М., 1969] был поставлен вопрос о “славянском кружке”, который был охарактеризован Б.Козьминым и Е.Кушевой как прототип организации русских якобинцев. Жигунов установил, что в то время существовало два славянских кружка, первый, умеренный, был основан в Париже П.Л.Лавровым, а второй — организован вокруг Турского нечаевцами. Что касается организации “Общества Народного Освобождения” то долгое время его настоящего исследования не проводилось.

Теперь рассмотрим статью Кушевой 1931 г. [“Из истории “Общества Народного Освобождения”. — «Каторга и Ссылка», 1931, кн.4(77)]. Эта статья была написана на основе ее доклада, сделанного 16-го марта того же года. Доклад не встретил положительного отклика. Большинство слушателей,

таких, например, как В.Фигнер отнеслись с недоверием к предположениям Кушевой о существовании неизвестной конспиративной организации. Была даже опубликована статья М.Фроленко [“Общество Народного Освобождения”. — «Каторга и Ссылка», 1932, кн.3(88)], отрицавшая существование организации. Кушева пользовалась не только архивными материалами Третьего Отделения, но и корреспонденциями из России, напечатанными в французской газете “L'Égalité”, редактировавшейся Жюлем Гедо. Уделяя особое внимание тому, что эти корреспонденции были отправлены из Орла и напечатаны в конце 1877 года, она предположила, что Общество Народного Освобождения возникло в конце того же года. Исследовательница указала на возможность тесных связей между кружками И.М.Ковальского в Одессе и П.Г.Зайчневского в Орле с “Обществом”. По мнению Кушевой, Общество Народного Освобождения возникло во время начала русско-турецкой войны с учетом стратегической перспективы, ибо русские яacobинцы рассматривали войну как признак кризиса царизма и пытались заранее направлять революционные действия. На предполагаемую датировку возникновения Общества Народного Освобождения указывает и его прокламация, в которой упомянуты события первых шести месяцев войны, начавшейся в апреле 1877 года. Подводя итоги, надо отметить, что в конце 1877 года началась организационная работа, о чем свидетельствует также листовка “Революционная расправа” /1878 г./, написанная К.Турским, который использовал для ее написания работу Нечаева “Народная расправа” /1869-70 гг./. В своей листовке Турский высоко оценивал организацию покушения на жизнь Трепова В.Засулич 24-го января 1878 года и вооруженное сопротивление И.М.Ковальского 30-го января того же года. Кушева указала также, что речь об этом же идет и в ряде статей Турского, таких, как “Революционная Пропаганда”, напечатанных в журнале “Набат”.

Почти годовой перерыв в издании “Набата” с конца 1877 года Кушева считала свидетельством того, что редакция “Набата” занималась в это время только работой по организации Общества Народного Освобождения. Обращая внимание на то, что при обыске у И.М.Ковальского было найдено много экземпляров “Набата” и его собственная корреспонденция с 1-го декабря 1877 года, Кушева утверждала, что он был членом Общества Народного Освобождения.

Интересно, что Кушева считала Н.Виташевского тоже членом Общества Народного Освобождения, принадлежавшим к кружку Ковальского, сам же Виташевский позже в своих воспоминаниях заявил, что Ковальский не был яacobинцем, а был бунтарем. Возможно, поэтому Ковальский и трактовался в издании “Деятели революционного движения в России, био-библиографический словарь” /1929 г./ как бунтарь. Кушева полагала, что эти мнения были результатом полного соблюдения правил и инструкций центра Общества Народного Освобождения, по которым члены общества не должны были знать друг друга в лицо, даже в своем кружке. Кушева также указывала на то, что в Петербурге действовал яacobинский кружок, в котором состояли М.Ошанина и В.П.Арцыбушев, воспитанные в кружке Зайчневского и ставшие членами тайной организации “Земля и Воля”. По отношению к деятельности “Народной Воли” она упомянула о том, что через Н.А.Морозова и Г.Романенко Общество Народного Освобождения попыталось установить связи с этой организацией. Она также поставила перед собой задачу исследовать степень проникновения членов Общества Народного Освобождения в революционное движение в самой России. Очень ценным для дальнейших научных изысканий было то, что Кушева привела в конце статьи текст “Устава Общества Народного

Освобождения”, “Инструкцию членам Общества Народного Освобождения” и “Воззвание от Общества Народного Освобождения ко всем честным людям России”.

Научные положения Кушевой долгое время игнорировались советской историографией. И только в последнее время вновь началось обращение к истории организации Общества Народного Освобождения. Е.Рудницкая в своей статье “У истоков “Общества Народного Освобождения”, по истории идейного и организационного оформления русского бланкизма” [«История СССР», 1986 г., № 6] рассмотрела последние западные исторические работы по этой теме. Исследовательница проанализировала также процесс формирования программы “Набата” в конце 1875 года и утвердила правомерность мнения Б.Николаевского о том, что организационная основа русского якобинства возникла на основе сотрудничества Нечаева с Турским. При этом она отметила значение “Основных положений”, написанных самим Нечаевым до его ареста в 1872 году, считая их истоком организационной работы Общества Народного Освобождения. По мнению Рудницкой, оба деятеля взялись за новую конспиративную организацию в сотрудничестве русских, сербских и польских революционеров.

В своей следующей статье “Общество Народного Освобождения и его русские связи /Кружок П.Г.Зайчневского/”, помещенной в сборнике “Революционеры и либералы России” /М., 1990 г./ под редакцией Б.С.Итенберга, Рудницкая имела главной целью разъяснить, что общество действительно существовало и развернуло свою конспиративную деятельность. Она пришла к выводу, что “Набатовцы” основали легальную организацию “Общество Вспомогательного Фонда политических преступников”, имевшую целью объединить всех русских эмигрантов. Во главе финансового отдела этого Фонда, по-видимому, стоял И.М.Шрейдер-Френк, который был и членом кружка Зайчневского в Орле. Таким образом, она указала на существование тесных связей с самой Россией.

Что касается связи между Обществом Народного Освобождения и кружком Зайчневского, то Б.Козьмин в своей статье “П.Г.Зайчневский в Орле и кружок “Орлят” (1873-1877 гг.)” /«Каторга и Ссылка» 1931, кн.10 (83) / заявлял, что поскольку кружок Зайчневского исчез в 1877 году, то у него не было возможностей связаться с Обществом Народного Освобождения. Но Рудницкая, однако, отметила необходимость уделить особое внимание деятельности “Фонда”, под именем которого продолжало действовать “Общество”. В этом контексте она подчеркивала значение Шрейдера-Френка, который играл роль посредника между “Фондом” и кружком Зайчневского. Рудницкая указывает, что из-за конспиративного характера Общества Народного Освобождения очень трудно выяснить его настоящую организационную структуру. Тем более ценна корреспонденция В.Бурцева и Турского, которая хранится в ЦГАОР и свидетельствует о том, что в начале 1920-ых годов Бурцев предлагал Турскому написать воспоминания об организации “Общества”, но тот по болезни не смог осуществить этот замысел.

Опираясь на воспоминания Н.С.Русанова, Рудницкая обнаруживает принципы, послужившие для выработки строго конспиративной организационной структуры “Общества”, в политических воззрениях самого Зайчневского. Рудницкая, характеризуя черты мысли Зайчневского, опирается на свидетельства Русанова. “Страстный якобинец”, каким знал Русанов Зайчневского в Орле, цитировавший “целыми кусками наизусть речи великих ораторов 1789-1794 гг.”, “политический революционер, в значительной мере заговорщического типа, видевший движущие силы революции в “революционной интеллигенции и

революционизированном ею войске с прибавлением лучших людей из общества и отрядов рабочего класса в больших центрах”, он более чем кто-либо другой из действовавших в России революционеров тяготел к Ткачеву и со стоявшей с ним в группировке Турского”. Кушева определила структуру “Общества” как состоящую из трех ступеней: центр, агент, член. По правилам, комитет /центр/ обладал всей информацией и приказывал членам низшей ступени, те должны были безусловно подчиняться центру и каждый должен сохранить тайну о другом члене. Имея в виду этот заговорщический характер общества, следует рассмотреть его возможные отношения с французскими бланкистами. Рудницкая отрицает их непосредственные связи, ссылаясь на письмо Турского к Бурцеву 18-го декабря 1924 г.: “С комитетом бланкистов сносился только я один... Как видно, и Вы тоже мало знакомы с нашей организацией лишь органом которой был “Набат”: иначе бы Вы не спрашивали меня об отношении “Набата” к Вайяну, который состоял только одним из членов комитета, тогда как наша организация находилась в договоре с комитетом и несли взаимную ответственность; наша организация была конспиративнее, благодаря чему так мало знакомы с ней и часто имеют совершенно ложное представление о ней”.

Рудницкая подтвердила положения Кушевой о том, что члены кружка Зайчневского, М.Н. Оровенникова-Полонская (М.Ошанина) и В.П.Арцыбушев позднее приняли участие в деятельности “Земли и Воли” и “Народной Воли”. Рудницкая считает, что русские яacobинцы имели значительные возможности проникать в русское революционное движение.

Споры вокруг русского яacobинства, проведенные в 1920-30-ых годах органичивались в основном поисками только в теоретической сфере, касавшейся происхождения большевизма. Организационные принципы его кружков почти не исследовались. Разыскания Рудницкой, опирающиеся на источники, думается, разъясняют предысторию или истоки партийной структуры большевизма. Такие научные работы ведут нас к более глубокому пониманию тех истоков, на которых строились принципы организации партии, выдвинутые, например, в известной работе В.И.Ленина “Что делать”.